

## 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会（第58回）

### 議事録

**日時** 令和6年1月16日（火）10:00～12:00

**場所** KKR ホテル名古屋 芙蓉の間

#### 出席者 構成員

北垣 聰一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	座長
赤羽 一郎	前名古屋市文化財調査委員会委員長・ 元愛知淑徳大学非常勤講師	副座長
宮武 正登	佐賀大学教授	
西形 達明	関西大学名誉教授	
梶原 義実	名古屋大学大学院教授	

#### オブザーバー

渋谷 啓一	文化庁文化財第二課主任文化財調査官	リモート
中井 将胤	文化庁文化資源活用課整備部門（記念物）文化財調査官	リモート
尾崎 綾亮	愛知県民文化局文化部文化芸術課文化財室	

#### 事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所  
教育委員会生涯学習部文化財保護室

**議題** (1) 水堀関連遺構の発掘調査について  
(2) 特別史跡名古屋城跡内での石垣カルテ作成について

**配布資料** 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会  
(第58回) 資料

事務局	<p>1 開会</p> <p>2 あいさつ</p> <p>本日は、年明けのお忙しい中、お寒い中、本事業にご参加いただきありがとうございます。また文化庁から渋谷主任文化財調査官様、中井文化財調査官様、大変お忙しい中、リモートでご参加いただいています。改めてお礼を申し上げます。元旦には、能登半島地震という大変大きな被害が発生しました。名古屋市は、微力ながら被災地の一つである七尾市を中心に職員を派遣しています。避難所の運営等の支援、あるいは消防関係などに職員を多数派遣しており、微力ながら名古屋城総合事務所としても1名の職員が、被災地の避難所の運営等の支援をさせていただいています。改めまして、被災者の皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。なお、名古屋城の城内では、特別被害は発生していません。この場で、ご報告させていただきます。</p> <p>さて、本日取り上げさせていただく内容は、2題を予定しています。議題(1)として水堀関連遺構の発掘調査について、議題(2)として特別史跡名古屋城跡内での石垣カルテ作成について、の2点です。皆様方の忌憚のないご指導、ご意見をいただきたいと思います。今年度も残すところ3か月を切りました。さまざまな議題について、ご指導いただき、着実に事業を進めてきましたが、引き続き年度内しっかりと事業を進めていきます。引き続き、ご指導をよろしくお願いいたします。限られた時間ではありますが、よろしくお願いいたします。</p> <p>3 構成員、オブザーバー、事務局の紹介</p> <p>4 本日の会議の内容</p> <p>資料の確認をいたします。A4で会議次第、裏面に出席者名簿となっています。A4で座席表が1枚。議事の資料は資料1としてA3で9枚、その後に議題2の資料として、A3で14ページあります。</p> <p>それでは議事に移りますので、ここからの進行は座長に一任します。北垣座長、よろしくお願いいたします。</p>
	<p>5 議事</p> <p>(1) 水堀関連遺構の発掘調査について</p>
北垣座長	議題(1)について、事務局よりご説明をお願いします。
	<p>こちらの議題ですが、過去ご議論いただいた水堀舟運に関連する議題です。前回のご説明からかなり期間があいいますので、一度振り返らせていただいたうえで、本日の議題に入りたいと思います。</p> <p>資料3ページをご覧ください。参考資料1として、名古屋城の水堀</p>

における舟運として、令和4年3月の全体整備検討会議のご議論から始まっています。石垣・埋蔵文化財部会においては、全体整備検討会議から話があり、令和4年の5月と7月の2回にわたってご議論いただいています。ご議論の中で、近世の水堀の状況について史料調査を行い、近世における水堀の変遷、舟運関連施設、および舟の運航事例など歴史的な事実が判明しています。詳しくは、資料7ページから9ページの参考3に、昨年度の会議資料を抜粋して掲載していますので、適宜ご参照ください。よろしく申し上げます。

ご議論の中で、船着場の整備について、現在候補地として考えている辰之口の遺構の前の埋め立て地の地盤状況を確認するために、基礎調査としてボーリング調査の実施を計画しました。こちらについては、ご承認していただき、令和4年度にボーリング調査を行いました。今後、調査結果などをふまえながら船着場の設計検討を進めていきます。その際には、ご議論をお願いしたいと思いますので、よろしく申し上げます。今年度は、全体整備検討会議で10月と12月の2回にわたり、ご議論していただきました。本日は、12月の全体整備検討会議で水堀関連遺構の発掘調査についてご議論いただいたときに、石垣・埋蔵文化財部会で検討していただくように、というご意見がありましたので、本日議題として挙げさせていただきます。

水堀についても、水堀における舟運について、昨年度に皆様からいただいたご意見を参考に、趣旨を再構成しました。こちらについても、10月の全体整備検討会議にてご説明しています。その方向性については、概ねご理解いただいている状況です。10月の会議資料を参考に説明した後、本日の議題の発掘調査についてご説明し、ご議論していただきたいと思います。

資料4ページをご覧ください。10月の全体整備検討会議のときの資料です。水堀の活用、舟運について趣旨を再構成しています。近世城郭では、広大な面積を有した高石垣を備える水堀が多く見られています。こうした水堀は、防御以外の多面的な機能を有しており、遊興の空間、物流や交通、大雨の際の治水などさまざまな機能があります。こうした水堀に光をあてることを通じて、新たな視点から城郭の魅力や意義を伝えることが可能になると考えています。そういった中、名古屋城の水堀は築城当時の姿をほぼ留めており、辰之口や南波止場など水堀に関連する江戸期の遺構が残存している状況です。

現在でも、水堀の水面からは10mを超える高さの高石垣や重要文化財の西北隅櫓を臨むことができます。江戸時代の名古屋城の水堀は、舟の運航をはじめさまざまな場面で活用されていました。引き続き水堀および水堀関連遺構について、文献等の史料調査をはじめとした総合的な調査を進めるとともに、このような歴史的な事実をふまえた船を運航することで、水堀などへの理解促進や文化財保護意識の向上、名古屋城の魅力向上を図っていくことを、水堀の活用の趣旨として再構成しています。

(2) 水堀の概要として、水堀の位置づけや過去の変遷、舟の運航についての内容をまとめています。昨年度お話した内容なので、説明は割愛します。

(3) 課題についてです。ご説明した水堀の活用に取り組むうえでの課題をまとめています。1つ目として、北波止場などの水堀関連遺構について、位置や残存状況などが十分に把握できておらず、総合的な

調査を行うことが必要な状況です。また、水堀などの理解促進を目的とした舟運について、水堀等の現況などをふまえて、どのような運航が可能かを検討する必要があります。

資料5ページをご覧ください。今後の進め方として、大きく2つの視点で、調査研究等と舟運事業に分けて、現状と方向性についてまとめています。

調査研究等の現状について、遺構が現存する南波止場周辺において、他の工事等がありますので、発掘調査の時期などについて検討が必要です。水堀に面して存在した北波止場などは、現在視認できるかたちで遺構は遺っておらず、遺構の位置や地下遺構の残存の有無は判明していません。今後の方向性として、辰之口など現存する遺構については、発掘調査を行って把握していきたいと考えています。北波止場などの残存状況が確認できていない遺構については、文献等の史料調査を進めるとともに、発掘調査の可能性を検討していきたいと考えています。また、水堀等に対する理解促進などに向けて、市民を対象とした講演会、シンポジウム、発掘調査の現地説明会などを適宜実施してまいります。

次に舟運事業についてです。現状としては、水堀の排水施設であった辰之口の遺構が現存しています。その東側には、護岸工事の改修の際に埋め立て地が設置され、残存している状況です。図2と図3に写真がありますので、ご確認をお願いします。舟の運航に必要な水深を確保できる場所が、現在まだ正確に把握できていない状況です。工事の関係で水位を下げていることから、当面の間、水堀の北東側では浅くなっているため、舟の運航に必要な水深が確保できない状況です。今後の方向性として、当面については、主に水堀の西北エリアを運航する舟運事業を検討します。その中で必要な船着場の仕様や、具体的な運航経路などを調査するために社会実験を実施します。それらの結果をふまえ、調査研究等の成果も加えて、事業計画を取りまとめていきたいと考えています。船着場については、史跡や堀底への影響を最小限に留めた整備となるように、辰之口の東側に位置する埋め立て地を候補地として活用することを検討しています。将来的には、調査等の成果をふまえて、往時の船着場の再現も視野にいれながら、水堀の北東側を含めた運航エリアの拡張等、さらなる充実に向けて検討を進めていきたいと考えています。

今お話した想定スケジュールを表1にまとめましたので、ご参考ください。

資料6ページをご覧ください。今年度は残り3か月ですが、予定として、水堀等に対する理解促進などを目的とした講演会の実施、社会実験を実施したいと考えています。社会実験については、3月中下旬を予定しています。

以上が、10月の全体整備検討会議でご説明した内容です。調査研究等の位置づけとして、水堀関連遺構の発掘調査についてご説明します。

ただ今ご説明したとおり、発掘調査については、まず現存する遺構について検討し、発掘を実施する計画を立てました。今回は、水堀関連遺構の中でも遺構の存在が明確である辰之口と南波止場について、発掘調査を実施したいと考えています。

まずは、辰之口の発掘調査についてです。辰之口は、水堀の排水施設として、17世紀には設置されていたと考えています。現在は、1ペ

	<p>一ジの右側、図4にあるとおり、辰之口の取水部分、入口部分の石積みを確認できます。また、平成10年の工事写真である図3をご覧ください。底面には、タタキのようなものが敷かれていることが、わかるかと思えます。それが、東側まで伸びています。これは、金城温古録に記載のある南蛮たたきと推定していますが、当初の遺構が残存している可能性が高いことがわかります。今回、辰之口の入口部分を発掘調査し、検討することで、現在の石組みの設置・改修時期や、タタキ状遺構の施工法、高さなどを把握し、遺構の保存と活用、具体的には舟運事業などにも役立てたいと考えています。</p> <p>発掘調査の範囲は、辰之口の排水水路の入口部分と、タタキが広がっている可能性のある埋め立て地部分、先ほどご説明したとおり、暫定的な船着場の設置を計画している場になりますが、合わせて計56㎡を予定しています。発掘調査は原則、近世遺構面まで、今回の場合は、タタキ状遺構までとなります。必要に応じて、断ち割り調査を行う場合があります。埋め戻し方法については、有識者の皆様のご意見を伺いながら決めていきたいと思えます。</p> <p>続いて、南波止場の発掘調査についてです。資料2ページをご覧ください。搦手馬出と二之丸の間の堀底、空堀と水堀の境界部分にあたります。現在、搦手馬出の石垣の積み直し工事を行っています。それに伴い仮設通路を設置しているため、すべては見えていませんが、図10のように、石組みが4石並んでいるのがわかるかと思えます。現状では、この石組は上下2段分が確認できますが、さらに下に続くことが予想されるため、段数と堀底の比高差を把握します。この石段の手前、北側にいくつか石が見えているかと思えますが、これとの関係などを明らかにし、南波止場の保存と活用に必要な情報を得るために調査を実施したいと考えています。調査区は、搦手馬出石垣と仮設通路の間の幅4m、長さ10mの計40㎡を上限と考えています。現地を掘り下げていくと、水が染みでてくることが予想されるため、ポンプで排出しながら調査を行っていきます。掘削の深さは、原則として近世遺構面までとしますが、部分的に断ち割り調査を行います。南波止場については、搦手馬出の石垣の積み直し工事が終了すると、仮設通路が撤去されるため、現地へのアクセスが難しくなります。工事完了予定の令和8年度末までに行う必要があります。</p> <p>一方で、図11の上の立面図をご覧くださいと、工事が進んで積み直しをする範囲をグレーで示していますが、こちらの石垣の高さが高くなってくると、左のほうに積み直し範囲がおよんできて、発掘調査区と重複してきます。調査区と積み直し位置が近くなってくると危険が伴いますので、発掘調査をできるだけ早く実施し、完了したいと考えています。</p> <p>水堀関連遺構の発掘調査の説明は以上です。</p>
北垣座長	<p>ありがとうございました。課題がいくつかでていますが、どれからでも結構ですので、ご自由にご意見等をお願いしたいと思います。</p>
宮武構成員	<p>質問です。南蛮たたきというのは、普遍名称ではなくて、珍しい言葉ですね。金城温古録には、どんなふう書いてあるのですか。</p>
事務局	<p>南蛮たたきという名称自体はできますが、それに対する説明は一</p>

	<p>切ないです。同じ南蛮に関する名称としては、二之丸の北側恩南蛮練堀があります。それについてもなぜ南蛮という言葉が使われているのかは説明がなく、文献調査も進めていますが、今のところ、なぜそういった名称がつけられているのかわかりません。</p>
宮武構成員	<p>写真を見せていただきましたが、図3ですか。この下に敷かれている、これを南蛮たたきというのですか。</p>
事務局	<p>おそらく、この敷かれているものです。底面に南蛮たたきが敷かれているというような文章があります。</p>
宮武構成員	<p>それ、重要なんですよ。敷石のようなものですよ。自然石ではなくて、埋設していますが、加工石材のようなものが敷かれている。タタキというから、土間のことだと思いますけど。</p> <p>わかれば、のちほど。</p> <p>あてずっぽうで申し訳ないですけど。先週、山口県の山口市にある萩藩の周防灘の干拓の際に、18世紀から幕末にかけて整備された巨大な干拓用の築堤樋があります。国の史跡になっていて、名田島新開作南蛮樋といいます。南蛮樋というんですが、同じように幅4mの高さ3mくらいの石組みの水路です。間に切石と滑車で使っている巨大な樋門があります。それを称し、南蛮樋と称していたらしいですが。問題は、その下のところ、護床、床です。同じなんですよ。巨大な切石を通水路の路面、床の部分に一面に敷いて、水が洗掘しないような。それを総称して南蛮樋といいます。地元でも、なぜ南蛮樋とそれをいつているのか、扉のことを言っているのか、築堤全体を言っているのか、わからないところがある。来年度以降から、護床の部分、床の部分のところの調査と復元を計画しているところです。写真を見るとよくわかりますが、同じような、なにか共通性があるなら面白いと思います。同じ時代のものでし、同じ構造をしているので。ちょっと参考までに、情報を交換されてもいいのかなと思います。</p> <p>もう1つ質問です。先ほど話された、南波止場の調査の際の、今の仮設通路が撤去されるのは、令和8年でしたか。</p>
事務局	<p>今行っている石垣の積み直し工事の完了予定が、令和8年度末予定です。</p>
事務局	<p>仮設通路については、この絵でいうと、だいたいまん中ぐらいまでは、仮設通路から石を上を持ち上げて行う工事ですが、ある程度段数が上ってきた場合は、石を上から降ろして積むような工程になります。この仮設通路の撤去時期が、令和8年度末までずっと残っているかどうかというのは、現段階では未定です。</p>
宮武構成員	<p>確認したかったのは、仮設道路があることで、調査の利便性などいろいろあることはわかりますが、仮設道路の下敷きになっている部分が、かなりの面積を占めています。逆に、撤去してみないとわからない、という部分がでてきます。今仮設道路から石垣側の外れているここだけの発掘調査ですが、ここまであるんですよ、多分。そうする</p>

と、ここだけの調査で整備するわけにはいきませんから。撤去のタイミングにあわせて、ここも調査しないといけないわけです。2段階で調査と整備をしないといけませんから、そこらへんのメニューを組み立てておかないと、手詰まりになります。そこらへんを、スケジュール的に、表1の中に置き換えたときに、うまいこと収まるのかな、というのが疑問です。それは、まだ議論を進められていないでしょうから、これからの課題として、すりあわせを検討していただければと思います。

それから、2つ要望があります。最初、この舟運というのは、既存の施設を利用して舟を浮かべればよいという、申し訳ないですけど、非常に短絡的な仕事から始まったんですけども。今これは、大変重要なステージに入っているだろうと思います。全国のお城の堀を使つてのさまざまな活用様式を、歴史的な事実に基づいて、調査も研究もきちんと行って、ある意味堀のかつての歴史的機能を再現しよう。そういう試みに移行しているのは、大変すばらしいと思います。そういう事例が、おそらく日本のお城ではほとんどないと思います。だからこそ、辰之口付近を含めて、まだこの部会で視察をしたことがないですよ。現地視察をセッティングしてもらいたいです。タタキを含めて。調査地区をどうするのか。次回は、委員の皆さんの目線で、現地で検討する時間をとってもらいたいです。

それから、資料でお願いしたいのが、見慣れてしまっていますけど。絵図でいくと、例えば4ページの図1で、これまで議論していますが、今回この部分と南波止場の部分をやる。肝心の北波止場や御次波止場などが付いているところ、下御深井御庭というだけで白抜きになっていて、なんのこともわからないですが、実は資料の中で重要なものをだされています。正保年間の絵図、7ページの図1です。これ、蓮池とつながっている場所ですよ。なおかつ文章を見ると、明治になってこの岸ができたわけで、江戸時代は全般、東半と蓮池がつながっていたと書いてあります。今、現状としている御次の波止場として使っている。どうも南にある、4つに分かれている岸間と、この間の水路のところに波止場が造られていたのではないですか。上が白抜きの資料で議論してもわからないです。これは、何の図に基づいているのかな。正保なんか図ですか。これはぜひ、次の資料で検討するときには掲げてもらって。今は名城公園の下敷きになってしまっているわけじゃないですか。景観的にはわからないですが、実は我々が復元しようとしている舟運機能というのは、ここだけの話ではなくて、こういうところに波止場をもって、蓮池とワンセットで楽しむような、そういう広大な機能だとすると。とりあえず、これから既存のこの埋め立て地だけ使って、波止場を、舟運を続けるみたいなことではなくて、ゴールは、こういうところの再現ですから。これから名城公園一帯の再整備、公園自体の機能や再活性の議論をされるわけですから。ここもきちんと調査をして、とりあえず暫定的にこの埋め立て地を使うんだけど、きちんと当時のものが地下から見つかれば、蓮池全部は復元できないでしょうけど、現実的にはこういう壮大な水の周りを使つての遊び、遊興の空間という機能があることが、残念ながら今の資料ではわからない。それと次回からセットの資料を出してもらってそれぞれの波止場の機能を議論して最終的には、できるだけそういうかたちに近づけていきたいということ、念頭においていただきたいと思います。

	<p>思います。</p>
北垣座長	<p>ほかにありますか。</p>
事務局	<p>先ほど宮武先生から南蛮たたきのご質問がありましたが、7 ページの右下のところに説明があります。金城温古録に、「樋の両側、石積み、底共に南蛮たたき」との記載があるということです。</p>
宮武構成員	<p>石積みの両側、底共に。両サイドの石積みも、床も、共に南蛮たたきという書き方なんです。想像をたくましくすれば、かなり精緻な切石で、削り込みや、組み合わせを施すような構造物で、先ほどお話しした名田島の南蛮樋遺跡の切石も切石工がつとめたものです。左右の石組みまで全部切石で組まれています。もしかすると従来の積石工が中心になって造られていた石垣のものとは少し違って、細工が主流の石造構造物であるので、その精緻さでもって、南蛮という名称になっているのかなと。これは私も調べています。</p>
北垣座長	<p>今、宮武先生から壮大なお話がありました。実は私も、そういうようなことを思っていました。南蛮たたきという言葉は知りませんが、南蛮樋というのがご指摘にありました。これはいずれも新田開発。18世紀段階のことです。各地で、例えば全国的にみて元禄段階には新田が、だいたい2倍になっているようですし、具体的にお話すると備前、石工の助けを借りながら、熊本の八代新田が生まれ、石橋などがでてくるのもそのへんです。全部切石の技術なんですよ。名古屋城石垣、当初は石を積む技能者が指導するんですね。それが、変わって新田開発に関わるようになる。総合的な技術の中に切石のスタイルが入ってくる。まさに今、宮武先生がいわれた、これからの壮大な話は、おもしろいです。これ全部、我が国の伝統的な技術というものが、城に現れてきているかな、という意味で、話は壮大だな。それを、どこまで、どのようにもって行っていくか、事務局には課せられてくるわけですけどね。</p> <p>私もいらぬことをいいましたけど、先生方、ご意見ありますでしょうか。</p>
赤羽副座長	<p>辰之口のことです。金城温古録以降、かなりいろいろなことが行われているのではないかと気がします。私どもは、黒川といっている北から南へ水を通して、堀川の浄化に努めたこともあるような。キーポイントになるのが、辰之口になるような気がします。金城温古録に南蛮たたきと書いてあるから、現在残っているのがそうかとは断定できない、かなり変化が加えられていて、新しい技術が導入されている。明治にモルタルが挿入されたと書かれていますけども、そのあたりは精密に調査する必要があるのではないかと思います。かなり歴史の経緯をたどると、おもしろい場所ではあるんですけど、ややこしい場所でもあると思います。それは気を付けて行っていただきたいと思います。</p>
北垣座長	<p>ほかに、ありますか。</p>



梶原構成員	南波止場ですが、階段状の遺構が図9にあります。これはいつ頃設置されたものか、現状ではわかっていますか。
事務局	<p>南波止場の成立時期については、記録では確認できていません。南波止場を利用するためには、資料の図6をご覧ください。このあたりに埋門があり、江戸期には、二之丸御殿がありましたが、この埋門がないと、ここに下りることができなかったと思われます。その埋門とセットか、それ以降にできたと考えています。</p> <p>埋門の成立時期もはっきりわかっていませんが、元禄10年、1697年の御城絵図には描かれていますので、それまでには造られていたと考えています。二之丸御殿がないと、そもそもこの埋門を造る意味もないと考えるため、造られたのは慶長期ではなくて、二之丸御殿が完成した元和期か、それ以降になってくるかと思っていますが、詳細な時期はわかっていません。</p>
梶原構成員	そういうことも含めて、発掘調査で明らかにしていくという理解でいいですか。石垣との取り付きを考えながら調査していくという理解でいいですね。
事務局	はい。
宮武構成員	<p>調査するにあたって、かなり奇態な構造物ですね。それぞれ調査の担当の方が、頭の中でイメージしているもので掘っていくわけですが。どういうものか見当つかないでしょう。私も、仮設道路が造られる前の状況がどうであったか、思い出し切れていません。全部石段だったのか。片一方が埋まっていたのか。仮設道路が造られる前の写真があるから、おこして検討してもらいたいと思います。</p> <p>今見えている部分は、単純に石段です。これが堀の水面まで段々で続いていくというのは、いわゆる護岸や、港場でいうところの雁木なんです。雁木が片側の石垣の裾までずっと続いてしまったら、堀幅が全部石段だとすると、舟を上へ上げられないです。そうすると一番下段のところ繋げるしかないわけですから、船着場の本体は、遙か東の端っこ、堀側の本体のほうになります。全国的な事例をいくつか集めたうえで、イメージをつくられたほうがいいと思います。例えば、松本城の月見櫓のすぐ真下に船着場がありますが、これは石段です。熊本県の人吉城は、球磨川と直結している部分があって、タタキ石のスロープになっていたと思います。和歌山城の岡口門の手前の重要文化財の土塀の端に堀に下りていく、これは石段なんです。石段になっているのは後世に改変されている可能性が、この前に試験坑からできました。調査して検出する対象の遺構が、どれがストライクなのか。いくつか事例を集めて、イメージをもって掘っていかないと、多分わからなくなってしまうのではないかという気がします。その点、調査前の準備として、情報を収集されたほうがいいと思います。</p>
事務局	ありがとうございます。どういった遺構がでる可能性があるかということについて、図11をご覧ください。ここに過去の調査区として黒

	<p>く塗ってあるところがあります。この調査目的は、搦手馬出の解体工事に伴い、根石の調査として、その初期に実施したものです。平成22年の根石調査で、このときは一番最初の調査で、地表から1mくらい掘ったところで、根石と当時は考えて調査をストップしているんですが、実際には、図11の立面図のところ、平成22年調査区の右側でもっと深いところに掘り進めた場所があり、その下から胴木がでています。この深さの上が根石なので、ここは根石には到達していませんが、この途中段階で栗石、根石と記されていますが、ここに礫敷のようなものが少し掘ったところがありました。こういった礫敷遺構などが、南波止場の下のところに連続してあるのかなと、少し予想しています。</p> <p>金城温古録では、舟は北側に繋いでおいて、南では繋ぎ場のようなものはないというような記述があります。ただ、停船するためには繋いでおかないといけないので、そういった舟つなぎの石や杭などの遺構が存在する可能性があるのかと考えています。</p> <p>あと、図10をご覧ください。石垣面、現在の水面はかなり低く設定されています。辰之口のあたりの南蛮たたきの可能性のある面のレベルが、3.7、8mくらいです。それよりも上まで水がきていたとすると、だいたい4m弱まで水面がきていたと考えています。上段のレベルが、4.2、3くらいで、そのレベルを考えていくと、かなり近いところまで水がきていたのではないかと予想しています。ここにかなり近いところまで船が来ていて、繋いでいたのかなと考えています。スロープ状の遺構や、雁木上、階段状の遺構というのは、もしかしたら存在しないのかもしれない、という予想もしています。そういったものも含めて、他事例を調査しながら、でてくる遺構も想定しながら、調査に臨んでいきたいと思います。</p>
赤羽副座長	<p>波止場のところのご説明がありましたが、広い目でみると、いずれは埋門から北の今のところまで全体を調査しないと、構造や機構がわかりにくいです。今ここで、半分だけを行ったとして、いずれは全体を調査する必要があります。これはやはり、仮設道路を使おうという変な気持ちになるからそうなるのであって。仮設道路は、今は有用な大事なところですけど、搦手馬出の工事が終わったら撤去するでしょう。撤去したあとのことを考えて、撤去して、仮設道路がない状態で、この部分をどう調査するのか考えたほうが先決ではないでしょうか。何回も同じ場所を重複して掘ることはやめてほしい。調査員の方に気の毒である。やるのであれば一気に、埋門から北の波止場の部分まで全体をあげるという視点で計画を立ててほしいと思います。何回も何回も同じようなことを、同じ場所を何回も掘るということは、やめてほしいなと思います。</p>
北垣座長	<p>いろいろと、これについては議論も多く、また、赤羽先生がいわれるように細かいところだけをやっても、それでは難しいような気がします。全体的な計画を立て直すことも考えてやっていったほうが、将来の名古屋城を解明していくために必要なことかもしれません。そういう話の一部が、今日でているのではないかと思います。</p> <p>でているのは、名古屋城段階の新田開発。全国でやっているような話も、入っております。そういうあたりの技術は十分に反映できるも</p>

	<p>のだと思います。事務局でもう一度、見直しする中で、本題に入っていくというか。そのあたりを考えていただくのもいいのかもしれませんが。</p> <p>ここは、市民の皆さんに喜んでいただけるような、大きな課題であるだけに、時間もお金も限られているわけですから。よくよく分けて考えていく必要があると思います。</p>
事務局	<p>一つ確認させてください。赤羽先生にご指摘された件ですが、確かに今回できるところは部分的にやらざるを得ないというところですか。私どもとしては、今回は試掘的に、状況をトレンチ状に幸にも調査ができるという条件で、その先のことはさらに考えたいという計画ではあります。今、赤羽先生からご指摘された点は、まずトレンチ状に掘る前に、全体をもう1回考え直ささいというご指摘をいただいたと、理解していいでしょうか。</p>
赤羽副座長	<p>そうです。ここを掘るなどいっているわけではなくて、非常に水堀の機構としてはおもしろいところで、大事なところだと思います。特に埋門というものがあるわけですから。そこから、例えば藩主が逃げ出すときに、どういうルートを使っていったかというのは、市民の方も関心をもっていると思います。そういう点では、調査をすべきだと思います。段取りが、仮設道路を前提にしたような調査ではなくて、もっと全体に、仮設道路を撤去したあと、埋門の構造から波止場の構造まで全体像がわかるような、そういう調査の方法をやるべきではないかと思います。やるなどということではありません。これから検討していただきたいと思いました。</p>
事務局	<p>今の部分について、今後、もう少し広い範囲を検討していく中で、その部分で一つの場所の特性というかネックになるのが、水と接していて、流水があります。特に、石段がどのレベルまであるのか。先ほどの石敷きくらいのレベルであれば、ポンプで排水でいけるかと思えます。それより深くなると、矢板など別の方法を考えないと、調査ができないかと考えています。そういった不確定な部分が多く、幸い範囲が限定されているのであれば、大型土嚢などで水を堰き止められるなど現実的なこともあります。まずは、ここの部分で遺構がどのレベルにあるのか、基本的な情報が、見えている石との関連など、そういった情報を収集したいと考えています。</p>
宮武構成員	<p>この写真を見てもわかるように、欠落している部分や、本来抑えるべき間詰が見えなくなっている場所があります。形状を把握するという目的も、確かにあります。同時にこれを保護して、将来的に活用するのであれば、後々転落したり、転石したりという場所については補って、保全していかなければいけない。現存状況を正確に把握する必要性はあるわけです。遺構保護という観点で。幸い今、こちらの工事をやっているのも、ポンプも充実していて、さらに大型の汲み出しの機械や、場合によっては一般道路にもすぐまわりこめる。そういう利点がある状況だから、ここで全体像を把握するという目的ではなくて、遺構状況の確認等の残存状態がどれくらい悪いのかを見るために、トレンチとしての遺構の保全を目的とした試掘調査を行ううえでは、今</p>

	<p>環境的には対応がしやすい、という解釈のもとで調査される分には、私は、そこは、やむをえないかと思えます。</p> <p>目的として、全部わからずにしてどういう状況だったのかと、そこでもって全体像を把握するというのは、無茶です。だから、何度も行わなければいけなくなるわけで。</p> <p>当面だとか、埋め戻すときに少し保全を行ったり、どかすときに土嚢袋を置いてやったりとか、さらに下段の礫敷きも欠落していて、石垣と根石との兼ね合いで補強したほうが良いという場面がでてくるのか。わからないですから。そういう意味では今、遺構保護という観点から調査することは、意義のあることだと私は思っています。</p>
北垣座長	<p>今日の議論の中で、どのようなことを将来的に考えていくのかということと、今宮武先生がいわれたような現実的な部分で、事務局としても少し分けて考える必要があると思えます。</p> <p>赤羽先生がいわれる考え方は、これからの名古屋城全体の整備に関わってくる、非常に大きな課題ですから、しっかり受け止めていただく必要があります。</p> <p>今の議題として、集約したところで、話をまとめてもらわないといけないわけです。今までの話の中で、これから当面やっていかなければいけないことの中で、かなり具体的な材料提供が得られたのではないかと思います。どうでしょうか。</p> <p>それでは、この件についてはこの方向で進めていただくということで、全体整備検討会議にだしていただきたいと思えます。よろしくお願いします。</p> <p>それでは、2 つ目の特別史跡名古屋城跡内での石垣カルテ作成について、事務局よりご報告をお願いします。</p>
	(2) 特別史跡名古屋城跡内での石垣カルテ作成について
事務局	<p>すでに、ご説明したところではありますが、名古屋城総合事務所では、平成 29 年度より天守台石垣を除くすべての石垣を対象に、石垣カルテの作成を行っています。紙の資料ではご用意していませんので、プロジェクターをご覧ください。石垣カルテでは、このように石垣の基礎情報を記載し、隅角、築石部を記載し、さらに変状なども記載しています。変状についてはこのように石垣のオルソ図に変状の位置等を記載しています。石垣カルテの進捗状況については、1 ページの表 1 にお示ししたとおりです。現在、主要な石垣については調査が完了しています。令和 7 年度に、城内すべての石垣の調査が一通り揃う計画です。名古屋城の保存活用計画では、石垣カルテの成果をふまえて石垣の保全方針を定めることを記載していますので、これと並行して城内の石垣全体の保存方針を検討していきたいと考えています。</p> <p>まず、石垣カルテの作成によって、現在把握されている、石垣の現況についてご説明します。個別の石垣の状況、石垣面の変状、後世の改変による変状の、3 つに分けて記載しています。</p> <p>個別の石材の状況は、4 ページの図 5 にお示ししています。図 5 に本丸 127H 石垣とありますが、間詰の抜けなどが所々確認できます。5 ページの図 6 では、隅角部分に割れが生じていることが確認できます。6 ページの図 7 では、名古屋空襲の際の被熱によって、石垣の表面に</p>

	<p>石材の割れや剥離などが確認されています。</p> <p>石垣面の変状としては、7ページの図8では、石垣の下部、隅角部分と築石部分の間に隙間ができています。これが広がっていることで、間詰石も落ちている状況が確認できます。8ページの図9では、石垣の上の部分で膨らみが確認されています。そのため、勾配がかなり不安定になっています。9ページの図10では、石垣の下部に膨らみができており、広い範囲で変状が確認されています。10ページの図11では、石垣の天端部分に樹木があり、これによって石垣の中に樹木の根が入り込んでいます。図11の下の2枚の写真でお示ししていますが、石垣が全面的に変形し、天端石がずれる状況が生じています。</p> <p>後世の改変による変状として、11ページの図12をご覧ください。昭和の戦後に一度積み直された石垣で、戦後に積み直された石垣と近世の石垣の境に段差が生じています。図12の下の写真でお示ししています。かなり境目がわかるようになっています。12ページの図13の石垣については、戦後に石垣の面の部分が撤去されて、石垣面については減失しています。減失した部分は、後世に積み直しされた部分です。</p> <p>かなり簡単ではありますが、石垣カルテの調査によって、城内石垣の現況が把握されつつある状況となっています。これをふまえて、城内石垣の保存方針の作成を進めていきたいと考えています。保存方針の位置づけとしては、1ページの図1にお示ししているとおり、石垣保存の基本的な考え方に則り策定するものとなっています。その考え方については、2ページ目の左側に記載しています。この考え方については、天守台石垣の保存方針の策定に際してご提示したものを参考に、提示しています。城内石垣全体についても、これをふまえて検討していきたいと考えています。</p> <p>今後のスケジュールとして、今年度まで石垣の現況把握、まとめ作業を行い、来年度はそれらをふまえた各石垣の状況に沿った保存方針を策定していきたいと考えています。</p>
北垣座長	<p>では、ご意見をいただきたいと思います。よろしく願います。どこからでも大丈夫です。</p>
宮武構成員	<p>ここからが大変なんですよ。前にお話したことの繰り返しになりますけども。石垣カルテの本来の機能なんですよ。昭和63年に、肥前名護屋城の山里口の石垣の一部が、集中豪雨で民家に倒壊したという事件がありました。それをきっかけに、いざ全面倒壊を起こしたならば復元する根拠がないということで、一面一面を四の五の写真で撮ってカード化したのが最初です。カード化するにあたって、もし完全崩壊したときの参考資料とするために、ということで始まったんです。それに、変状やひび、高さなど数値のフォーマットが付いていて、どういう名前にしようかといったときに、これはいわばお医者さんのカルテですから、これから先の変化を見ていくための基礎資料にしようということで、石垣カルテと命名したのが、北垣先生です。</p> <p>最初に行われたのが、状況の正式把握ではなくて、これから先ずっとモニタリングしていくための台帳として作っているんです。実際には、全国で石垣カルテを作って、それで安心しておしまい、後にもしないというのがほとんどです。本義はそうではなくて。確かに、</p>

	<p>どこがどのように傷んでいるのか、これから補修方針やハザードマップを作るうえでの基礎資料になるんです。重要なことは、大変なんですけれども、定期的にこれに書き込んでいかなければいけない。どこにひびがあり、孕みが劣化してどうなっているのか、危険箇所はどこなのか。最後にご説明されたとおり、これから先の保存方向の策定もありますが、運用のかたちを具体化していくためにどうするかというのを議論していかないといけない。ほかのお城でも手一杯ですけども、広大な名古屋城の石垣のチェックをどうするのか。そうすると、事務局ではなかなか決めきれないところがあると思います。壮大なマンパワーがいりますから。いくつか今議論しているのは、島原城や、国の特別史跡になった大分県の佐伯城、どちらも石垣カルテを作っています。行政側が主体となってチェックするのではなくて、地元の守る会や歴史愛好会、そういった方々に分担しあいながらチェックしていただく。市民の参加型で、地元のシンボルであるお城の石垣をずっと見定めていく。変な話、江戸時代に管理保護制ってあったんですけど、二之丸の何番石垣は、何々家が永久に管理するではないですが、そういうみんなでチェックしていくということもあるのではないかと思います。実現はできていませんが、1つの方策としてかなり検討しているようです。それも手だだと思います。市民の方々と一緒にこれから守り続けていく、ということもあるなという。大変ですけども。</p> <p>それともう1つ、資料1ページの右側のウ。後世の改変による変状という部分です。来週姫路で行われる城郭石垣の総合研究会でも議論になるのではないかと思います。今回の七尾の、能登大震災で、金沢城で崩壊を起こした石垣の報告は私もいただいています。その内容を聞くと、明治以降なんですよね、壊れているのは。熊本城も震災で明治以降の石垣が相当、弘前城の天守台自体が大正以降の積み直しだった。仙台城もそうなんです。江戸期が終わって、明治以降の、近現代以降の石垣の堅牢性というのは、疑問符がついてきている。そうすると、こういう震災が起きたときに一番警戒しなければならないエリアが、江戸時代の変状を起こして、見た目でも危ない石はもとよりですが。一度警戒的に、明治以降の廃城後、さまざまな目的で積み直されたり、積み足されたりしている部分の石垣は、いち早く色分けをして、このカルテに基づいて別に把握していく必要があるのではないかと思います。そういったところが動線と一致していたり、入城者がたびたび通過する場所については、一定の警戒を考慮しておく必要があるのではないかと思います。実際に、近現代以降の石垣の構造上の弱さについては、これからの議論にかけなければいけないですが。ここ10年以上続いてきている震災の倒壊状況から見ると、これは指摘できることだと思います。そういった議論のためにも、こういった引き出しは重要だと思います。</p>
北垣座長	<p>大変貴重なご指摘をいただきました。委員の先生、ご意見ありましたら、お願いします。</p>
西形構成員	<p>今回、石垣カルテをほぼ完成させられたということですが、宮武先生からもご指摘がありましたけども、石垣カルテを作ってから大変だということは、確かなことだと思います。</p> <p>石垣カルテと同時に、名古屋城さんでは石垣の目視による判定を、</p>

	<p>基準をもって行っていると思いますけども。そのへんのデータを全体的に、もう一度見せていただきたいです。委員会で応用できるようにしていただければと思います。</p> <p>その結果に基づいて、まずは石垣の安全対策です。見学者の方に及ばないような対策です。もう1つは、石垣そのものの保全の対策。この2つがあると思います。石垣カルテを作ったら、できるだけ早い時期にその検討に入るとするのは必須条件だと思います。文化庁さんのほうで診断マニュアルが、案としてでてくるとと思いますので。それに従ってやるにしても、石垣カルテができあがった段階で、できるだけ早い時期に安全対策、石垣保全のための対策に分けて、検討に入りたいと思います。</p> <p>それから宮武先生からご指摘がありましたね、近現代の石垣が壊れる。今までは、積み直したところは、構造的に不連続なんだとか。考えてみれば、ごまかしなんですよね。金沢城の被害を見ましても、なぜなのか、というのをきっちり調べる必要があるだろうと思います。本当に、構造的に何が違うのかというのを。中には石の控えが短いとか、そういうお話もあります。本当にそうなのかということです。</p> <p>考えていくと、石垣というのは、ひよっとしたら経時的に強くなっていくのか、とか。その時間が短いから、近現代に積み直した石垣というのは壊れやすいのか。こういう考えもあるかと思えます。そのへんは工学的にも難しく、逆にいうとおもしろいところでもあるんですけども。名古屋城さんのほうで、もしそういうことが検討可能であれば、ぜひカルテに加えて検討項目に加えていただければと思います。重要なことですから、そのへんを加えて、石垣カルテの実用化に向けた計画をやっていただければと思います。</p>
北垣座長	<p>大変厳しいことですね。これからの、全国の城郭石垣が抱える課題ですよね。急に、えらいことだといってみても、なかなかできることではないので、できるところから実践することです。そういうことを、特別史跡名古屋城として、当たり前にするにはどんな対策をしていくのか。これはすでに、先生方からお話がでています。これから、一つひとつ着手していく。こういうお話であったと思います。</p> <p>いかかでしょうか。ほかにも何か、事務局のほからありますか。</p>
事務局	<p>石垣カルテについては、次回以降の部会で継続的に議題としておだしし、その度にご指導いただきたいと思っています。またある段階では、現地の実際の石垣も見えていただくようなことも計画しますので、引き続きよろしくお願いします。</p>
宮武構成員	<p>全部で何面くらいありましたか。</p>
事務局	<p>400番台くらいまでは石垣番号がついていますので、400面で、長さで9km前後。</p>
宮武構成員	<p>1人で見ると500日くらいですね。</p>
西形構成員	<p>オルソを書いているのは、3Dのデータがあるという理解でいいです</p>

	か。
事務局	3D データをオルソ化したものです。
西形構成員	そういうことですね。3D スキャナーでの計測は、どのくらい終わっていますか。
事務局	3D 画像の計測については、基本的にはほとんど城内すべて終わっています。残りは三之丸のところですか。現存する石垣のところですか。
西形構成員	そのへんのデータというのは、どうなんでしょうか。それぞれのお城の問題点かなとは思いますが。3D のデータはそれは名古屋市さんのほうで常に管理されていて、見たいときにそのデータを見るという状況になっていますか。
事務局	3D データについては、3D の基となる写真で納付されています。必要に応じて、センターに設備がありますので、その写真を処理して 3D 化しています。
西形構成員	例えば、我々が、この石垣のデータが見たいといえ、すぐにどうか、用意していただける状態にあるということですか。
事務局	少し粗い精度ではありますが。
西形構成員	わかりました。
宮武構成員	今西形先生が確認されたとおり、客観的に検討する素材までは整ったということ。2 ページにある最後の、これからの方針策定に向けてのスケジュールの中では、各石垣の状況にあわせた保存方法と書いてあります。この際ですから、前々からお願いしているのは、城内の見学者の日常的な通過動線のレイヤーもかけてみてください。場合によっては人がいかないところ、頻繁に人が通るところというのがありますから。その濃淡をいち早くつけたうえで、おそらく時間がかかりますので。個別の保存方針を策定するというのは、むしろ、エリアとしては必要だけれども、回避させたり、何かあったときに、それをいち早くどうにかするという判断が、まだつきませんから。次の資料では、試していいです。完成のかたちではないので、動線を入れたレイヤーをかけた図面を一回だしてみてください。それと重ねると何か見えてくるはずですから。お願いします。
北垣座長	ほかに、ありますか。いかがですか。 おそらく、これからは具体的な活用法になってくると思います。ここが一番肝心でして、それぞれのお城をもっている自治体で、どう活用していくか、という問題です。その城によって変わってくるという問題があります。だけど一般的に変わらない問題も今、先生方がいわれるように、動線の問題があります。これは、人を城内に入れるわけですから、基本的には変わらない問題。そこだけ、これはどうしても



	<p>見てほしい、というようなところも、それぞれもっているわけですからね。名古屋城ではどうするのかという喫緊の課題としてよろしくお願いします。</p> <p>ということで、時間がかかりつまっておりませんが、いかがでしょう。さらに、これだけはいつおきたいというご意見がありましたら、お願いしたいと思います。尾崎さんは、いかがでしょうか。</p>
尾崎オブザーバー	<p>石垣カルテの話でいえば、一般の利用者のお話ができました。やはり名古屋城は多くの人利用される、来る場所ですので。まず、今いわれたような、一般的に人が通るルートに関しては、崩れないように保全するなどというお話がたくさんあったと思います。そのあたりは早急にやる必要があるのかなと思います。また、取り組んでいただきたいと思っています。</p>
西形構成員	<p>北垣座長がお話されたことが、非常に重要な点だと私も思っています。文化庁さんからもリモートで参加されていますが、今度でくる耐震マニュアルですね。石垣保全のための方法が書かれているわけですが、もちろん、それをベースにしなければならぬですが、そのあとは、それぞれのお城の1つの方針を、それぞれがもっていただくということが、非常に重要ではないかと思っています。そこに書かれている手順をそのまま見ていくと、それぞれのお城の中で問題がでてくるような気がします。もちろんマニュアルはベースにしなければいけないですけど、その結果に従ってどんな判断をしていくのか、どう対処していくのか、というのはそれぞれのお城にまかされているといふふうに思います。ぜひその辺をよく考えられて、マニュアルを対策に使っていただければと思います。</p>
北垣座長	<p>今、文化庁さんにもお付き合いいただいているわけですが、中井調査官、急なことで申し訳ないですが、今日の議論を聞いていただいて、何か感じられたことをいただけたらありがたいです。よろしくお願いします。</p>
中井オブザーバー	<p>私のほうからは、2点ほど。まず水堀の関連遺構の調査については、私も把握していないところが多くて、見当違いの質問かもしれませんが、目的と、調査のするところというのが、腑に落ちないところがあります。今までものを見てもみますと、舟を浮かべさせるという運航が、西側のほうをやりますといいながら、調査は西側の辰之口の発掘調査と、南波止場のほうというふうで。南波止場のほうの調査成果というのは、今回の舟を浮かべさせることについて、直接すぐには関係のないことなのかと思ったり。将来的には東側のほうにも運航のエリアを、調査成果に基づいてということは、これに向けてやっているということは、将来的な話のために今調査をしなければいけないのかなという。それが、あまり腑に落ちなくて、それによっては、先ほど議論にありましたけど、どこまで調査を拡大してというか。今の時点で、確認調査でいいということなのか。何が目的で、この調査エリア設定したのか、ちょっとわからないというのがあります。今すぐ答えていただくことはないんですけども、座長さんにもいわれていたように、全体の計画の中で、本当にここはどこまで、どう調査するのか、という</p>

	<p>ことに関わってくると思います。今やらなければならぬ調査が本当にここなのか、というのが、私のほうで腑に落ちないところです。これは、意見ということで聞いていただければと思います。</p> <p>もう1件の石垣カルテのほうは、先生方の意見に同意でありまして、私のほうからも繰り返しになりますけども、石垣カルテはできてから完成ではなくて、スタートラインです。宮武先生がいわれたように、これをどういうふうに応用するか、どういうふうに活用するか、どれだけこの石垣カルテを充実させていくか、ということが重要だと思います。最後にでましたように、人の動きの動線計画ということで、動線との関係は、全国で歩いて歩いているところの一番です。人が歩くところとそうでないところというのが、同じ石垣の状況においても対応が変わってくるというのは、一番大事な視点だと思います。今度の資料で動線などとのからみをだしていただくように、宮武先生がお願いしましたが、私もお願いしたいです。石垣カルテの成果によっては、動線自体も見直すということを検討していただければと思います。</p> <p>2点ほど、気になったことでした。以上です。</p>
北垣座長	<p>急なことで、本当に申し訳ありませんでした。大変ありがとうございました。</p> <p>渋谷調査官、一言、よろしくお願いたします。</p>
渋谷調査官	<p>活発なご議論ありがとうございました。石垣カルテのことについては、先生方のいわれるとおりです。これからがスタートラインというか。なおかつ、名古屋城としての運用の仕方といいますか、やり方があるというところで、非常に規模の大きい城郭ですので、大変かとは思いますが、きちんと特別史跡として保護していくにあたって重要なことです。引き続き進めていただければと思います。</p> <p>舟運については、当初の始まりからかなり大きな話になってきて、また南蛮という言葉についても、なるほど、ほかの史跡等の事例を見てみなければならないといご指摘など、私のほうも勉強をさせていただいたところがあります。水堀の舟運についても、港というか波止場関係の遺構全体をどう見ていくのか。そして、今回、どこまで何をどうするのか、というところの位置づけが必要だということ、本日の会議である程度方針を示さなければならない、ということをご指摘されたところで、そういうようなご指摘をいただいたのではないかと考えています。引き続き、多くの事業がありますが、ご指摘、ご指導をいただきながら、事務局は進めていただけたらと思っています。以上です。</p>
北垣座長	<p>ありがとうございました。いろいろご意見をあらかじめいただきましたので、これも次の会議へまわしていただくということで、よろしくお願いたします。</p>
事務局	<p>北垣座長、構成員の皆様方、オブザーバーの皆様方、大変ありがとうございました。特に水堀等については、他城郭の事例などを、先生方からたくさん城郭の名前もいただきましたので、そういったところを確認しながら進めていきたいと思っています。また、石垣カルテについ</p>

	<p>ては、皆様方からご助言をいただいたとおり、来城者の安全と石垣の保全というところをしっかりとバランスをとりながら進めていく必要があると思います。今後も当部会において活発なご議論をいただき、進めていきたいと思ひます。</p>
--	---

それでは、以上をもちまして、本日の石垣・埋蔵文化財部会を終了いたします。長時間にわたりありがとうございました。